宗教情操教育はなぜ必要か

――特に真宗門徒の宗教倫理に関する調査研究を踏まえて――

岐阜聖徳学園大学学長　口　羽　益　生

1．はじめに

お招きいただき光栄に存じます。最初、ご依頼がありました時には、学部の真宗学科や大学院実践真宗研究科の学生を主な対象とする講演をお願いすると聞きました。ですから来聴のかなりの学生さんは真宗伝道に志をもっている方だと思いましたので、是非お伝えしたいことがあり、お引き受けしました。お伝えしたいことというのは、近年は、あまりにも社会や人間性の劣化現象が多く、宗教情操教育が非常に求められておりますのに、今日、浄土真宗教団は未曾有の危機的状況にあるように思います。この点に留意して、真宗のみ教えの伝道者には、広い視野をもち、もっと積極的に現実に対応してほしいということであります。

その前に、私と本学との関係について少しお話したいと思います。私もむかし、この大宮学舎のすばらしく自由な教育環境の中で多くのことを学んだ一人であります。すばらしい先生方がおられ、戦後のことでもありましたので、戦場から復員して学び直す意欲的な社会人学生も多く、また非常に幅の広い教養科目がありました。語学も、英語、ドイツ語、ラテン語、梵語と幅広く学ぶことができました。私は仏教を学びに本学にきたのですが、棚瀬襄爾先生というよき師に出遇い、自分の幼少時の外国での異文化体験の影響もありまして、文化人類学・比較社会学の観点から宗教を学ぶことに関心を持ちました。本学は経験科学としての宗教学や宗教人類学のすばらしい伝統がありましたし、この分野で日本でも著名な先生方がおられましたから、それらの古典的名著が大宮図書館に驚くほどそろっていました[1]。

現在、不思議なご縁により岐阜聖徳学園大学の学長職についていますが、この大学は、本派本願寺系僧侶有志により創設された宗門関係校であり、仏教精神による人間教育を建学の精神としています[2]。しかし建学の精神教育に携わっている教員は３名のみで、必須科目の宗教学と浄土真宗を中心とした仏式の年中行事はありますが、建学の精神を全員に周知させる組織的対策が必ずしも十分ではなく、文字通りショックを覚えました。これは、建学の精神教育に携わる教員が若いせいもあり、その教育を大学の組織において、どのように進めればよいかというような知識や経験を十分に持っていなかったことにもよると思います。

しかし、非常に熱心な職員や教員の一部の支援により、いろんな角度から教員・職員と学生の意識変革を組織的に推し進め、ようやく建学の理念についての理解を深めることが、学徳兼ね備えた人間教育にとって重要であることが理解されてきました。私が皆さんにお話ししたかったのは、このような私の経験を踏まえてのことです。

さらに真宗教団は、現実社会の動向を見ますと、危機的状況に直面しているように思います。本願寺派教団のみについて申しますと、その社会的地盤である西日本では、人口の過疎化、少子高齢化が進み、特に若者の大都市圏への移動の傾向が強く見られます。

私が従事しました本山での「宗勢実態基本調査」の結果では、真面目な宗教的関心は、両親や祖父母、住職と坊守の影響によって生ずる強い傾向が見られますが[3]、若者が宗教的情操教育を家庭や寺院で青少年期に受ける機会が著しく減ってきています。

また首都圏における宗教の実態は、カオスの状態に近いようなところがあります。東京における職業別電話帳の宗教の欄を一度見ていただきたい。一寺院の広告に、宗派名は浄土真宗、念仏宗、一向宗、築地本願寺派とあり、水子供養歓迎、住職は龍谷大学卒等々とあります。

また、今後、国内外の国際化はさらに進展するでしょうが、これらの問題について教団は、どこで検討し、どう対処するのか、これらのための人材育成はどこで行うのか等の問題があります。これらが不透明のままでは、21世紀における社会のグローバル化時代の教団の将来に不安を感じます。

2．宗教情操教育について

以上の諸問題の理解を深めるために、まず最初に宗教情操についてお話いたします。

宗教情操の情操とは、真、善、美、聖というような価値あるものに心惹かれ、それらを求めようとする高度な感情のことであります。このような感情は、怒り、憎しみ、キレルというような一過性のものではなく、知的要素を含んだ持続的で高尚な感情のことです。

また主観的には、宗教情操とは、生きるために重要な宗教的真実の世界を求め、内面化し、それに合った価値観（望ましい行為基準）を自らの行動指針にしようとする心情であると言えます。

（幼少年期の教育の意義）このような情操教育のためには、幼少年期の教育が非常に大切であります。

この件について、ある日、ケント・ギルバートさんという日本語の達者なタレントがいますが、この人の講演を聴いたことがあります。この人は弁護士で、熱心なモルモン教徒でもあり、同時に教育について一見識を持っている方です。この方が岐阜県の私学関係者の会合で、子供の教育について講演をしたことがあります。その明快な考え方に感心したことがあります。

自分の子供の教育を例にして、ギルバートさんは、子供の教育について次のように説明しました。教育には、二つの重要な側面ある。それは「知識の教育」と「生きるための人間性の教育」です。この後者のために、モルモン教徒は、青年期に布教という名目で、海外生活を体験するが、自分の一人の息子は、かってベトナムへ行き、今は、大学院の受験勉強と同時に裁判所などでベトナム語のボランチア通訳をしている。次男は、現在、モンゴルへ行っている。日本では、教育はほとんど学校に任す傾向があるが、これは間違っている。特に「人間性の教育」には、基本的には家庭、学校、教会（教会は、日本では、地域に当たるかもしれないが、）の連携が重要であるように思うというのです。

ギルバートさんの「人間性の教育」の部分が情操教育の部分に当たり、彼はモルモン教のことは控えめに言っていましたが、教育にとっての基本単位として家庭、学校、教会の三者を挙げていましたように、教会を重視しているのは、「人間性の教育」のためには、彼は宗教情操教育が中心となると言いたかったように私は理解しました。情操教育の中でも、宗教情操教育は、後にもお話しますように、人格の形成に基本的に影響を与えますので、仏教者ももっと積極的にこの教育問題を考えねばならないと思います。

私自身の青少年期の体験から考えましても、宗教情操教育にかんしては、青少年期の教育が重要であると思います。たとえば、私は寺の生まれですので、お寺でのお説教の時には、本堂の右端の再前列で寺族の者は聴聞するようにいつも厳しくしつけられました。そのために、説教で、よく引用される和歌や出来事は、いつの間にか覚えてしまいました。

京都女子学園の創始者である甲斐和里子先生の和歌の「ともしびを　高くかかげて　わがまえを　ゆく人のあり　さ夜なかの道」や「岩もあり　木の根もあれど　さらさらと　たださらさらと　水の流るる」などは、好きな歌でしたし、いつの間にか胸に刻まれてしまいました。

また私の父は、本堂で夕方の勤行を終えると、庫裡のお内仏様で短い偈文を読み、『蓮如上人御一代聞書』の繰り読みをしていましたが、これも子供の時から私も父の後ろでお参りして聞かされました。その内容は、固有名詞の多い文章でしたから、子供には、理解しにくいところが多かったですが、「一宗の繁昌と申すは、人のおおくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ。・・・」等は、何となく理解できるものでした。

「宗勢実態基本調査」の結果では、子供の宗教心の育成には、家庭、日曜学校、ボーイスカウト等は、重要な意味を持つことが解明されています。むかしは、家庭教育もしっかりしていましたし、日曜学校活動も盛んでしたが、今はこれらの活動が弱くなっていますので、これらに変わる活動が必要です。せめて宗門関係の幼稚園を含む小中学校では、積極的に宗教情操教育を推進すべきであると思います。

（よき師、よき友との出会い―「慧眼は真を見る」―）しかし、成人すれば、自発的によき

情操を身につけることが重要であるように思います。

人生で多くのよき人と出会えた人は幸せです。むかし、若い雲水は師を求めて諸国を行脚したと言われています。日本にかぎらず、イスラム教国のマレーシアでも、仏教国のタイでも、若者は修行のために故郷を出て旅をしました。ですが、よき師との出会いは、求める方に見る目がなくてはなかなか成就しません。

よき師を見る目は、常に求道のこころなくしては育たないと言ってもよいでしょう。親鸞聖人と法然上人の出遇いは、親鸞聖人の熱烈な求道心によって自ずと慧眼の徳を身につけられたことによるものと思います[4]。成人してからは、真実を求める気持ち（求道のこころ）があれば、「染香人」（『浄土和讃』）のたとえのように、真実を見る目は育まれていくものです。

3．心の世界の多様性と宗教心―宗教情操教育の重要性についての理論的背景―

今、私がお話して参りました考え方については、最近の宗教理論があります。特に私が専門とする文化人類学や社会学の最近の宗教研究には、大変すぐれたものがありますので、それを少し紹介します。

今からお話します内容は、米国プリンストン大学の高等研究所教授として活躍されたクリフォード・ギアツ氏（Clifford Geertz, 1926-2006）の理論です。その宗教理論は作今、最も多く引用されていると言われていますが、この人の心の世界の多様性と宗教に関する説明は、宗教心理学の研究で知られているウィリアム・ジェームス（William James）や現象学的社会学者のアルフレッド・シュッツ（Alfred Schütz）の理論を踏まえての説明です。その辺の詳細については省きますが、本日の話に関わる部分のみについて取り上げます。

シュッツは、心の意味世界が多様であることを示すのですが、この理論は多元的現実論と言われています。つまり、テレビドラマを見て涙ぐんだりするときには、心はそのドラマの世界に入り込んでいますし、漫才を聞いて笑うときにはその笑いの世界に入っています。美しい絵や庭を見るときには美の世界にいますし、心はまた音楽の世界に入り込むときや夢の世界にいるときもあります。このように心の世界は複雑多岐にわたっています。

このような心の世界の中で、どんな人も逃れることができないのは、常識の世界です。ですからこれは「至高の現実」と言われています。つまり、暴飲暴食をすれば、身体を痛めるし、勉強しなければ落第する。人を裏切れば、それなりの制裁を受ける世界のことです。聖人君子といえどもこの世界から逃れることはできないのです。この世界があまり苦しいと、つい心は夢の世界に逃避することにもなります

宗教の世界も、この心の意味世界の一つです。しかし心の意味世界には、入りやすい世界と入りにくい世界があります。音楽や美の世界などの良さを知るためには、ある程度の学習が必要です。若いときに音楽や芸術文学の良さを知るためには、ある程度学習しなければ、人の心

の意味世界、すなわち、教養の世界は非常に狭い範囲のものになります。

宗教の世界は、芸術や学問の世界と同様に、あるいはそれ以上に入りにくい世界でもあります。ですから、キルケゴールという哲学者は、信仰をもつた瞬間のことを比喩的に「飛躍」と言っていますが、ギアツは、「飛躍」という比喩は、初めて信仰に触れた時の体験のたとえとしてはよいが、日常的な信仰にはむしろ「滑り込む（slip-in）」というようにたとえた方がよいのではないかと言っています。日常的なお念仏には、ギアツのたとえの方がぴったり合うように思います。しかし、宗教の世界には、子供や「一文不知」の人でも、すっと入れる面があります。

またギアツは、宗教の入信の動機としては、理論的には、人生において常識的、科学的に理解できず納得できないような危機的状況に出会ったときが、入信のきっかけになると言います。たとえば、一人娘が国際線の航空機のスチュワーデスとして働いているときに航空機事故で亡くなった場合、多くの航空機の中で、そして大勢の乗務員の中で、なぜ自分の娘がそのような巡り合わせになり、なぜ真面目にやっている私(親)がそのような目に遭わねばならないのかという事を、親が納得できるように説明してくれる常識や、科学的説明などはなく、それを納得できるように説明できるのは宗教的世界観以外にないというのです。

これはギアツや、かの有名な社会科学の巨匠マックス・ウエーバーによる説明です。マックス・ウエーバーは、これを「意味の問題」と言っています。つまり、このような状況は、その意味がよく納得できないのです。このような状況の意味を知らせてくれるのが宗教であるというのです。

ですから信仰を持つということを、心の意味世界の問題としてみると、宗教の心の意味世界の壁を突破して、その世界に入ることであり、信仰とは宗教的意味世界と常識の意味世界との往復であるというのです。つまり、心を純化してくれる世界との出遇いであるというのです。私は本学の一年生の頃、お念仏の意味がよく分からず、悩んだことがありましたが、その頃、哲学者三木清の獄中での『遺稿親鸞』を読み、「念仏とは、賛嘆と懺悔である」という言葉に出遇い感動したことがあります。

宗教心にとって、このような宗教的世界との出遇いは、非常に重要なので、どの宗教においても、定まった時間に礼拝や勤行や座禅をすることを決めていますし、荘厳な儀式、法話・説教や座禅などの時に、宗教的真実の世界に触れることが強調されます。

このように考えますと、浄土真宗のお念仏は、宗教的世界との出遇いという点におきましては、最も簡素にして合理的な方法だと言えます。それは時間、場所、方向、行住坐臥を問わないからです。

またこのように考えますと、宗教に関する講演・講義と法話・説教との違いが明確になります。私は子供の時に聞いた説教の中で、次のような逸話を何度も聞きました。

ある若い講師が本山の総会所で説教をしていて、たまたま『高僧和讃』の「生死の苦海ほと

りなし、ひさしくしづめるわれらをば」の説明に入ったときに、聴衆の後ろのほうに恩師がおられることに気づき驚き、次の句をど忘れして、前の句を何度か繰り返し述べて、やっとのことで次の文句を思い出し「弥陀弘誓のふねのみぞ、のせてかならずわたしける」と語って、冷や汗をかいて、説教を終え控え室に帰ったら、そこへ恩師が訪ねてこられ、今日はすばらしいお話を聞かせていただき有り難うと感謝の意を述べられたという話です。この意味がよく分からなかったのですが、若い講師が前の句を繰り返し述べているときに、その恩師は、宗教の世界に深く沈潜され感動されたのでしょう。宗教行事には、そのような感動が重要な意味を持ちます。

心の他の世界と心の宗教的世界とは、次の2点において異なっています。それは、宗教的世界と常識的世界とは全く違う論理を持ち、宗教的意味世界は人格を改造する力を持っているということです。

たとえば、すぐれた宗教においては、宗教的真実は絶対的普遍的真実が中心にありますが、常識の世界では、善悪は相対的なものです。このため、常識世界の論理からすれば、いかに偉大な人であっても、宗教世界の視点では、罪悪深重の凡夫であります。

したがいまして、宗教的世界と他の心の世界との違いは、人が信仰を通してその世界に入り込むほどに、人は次第に宗教的世界の論理の影響を受け、人格は改造されるということです。染香人という言葉は、このことを比喩的によく表していると思います。『歎異抄』におきましても、「わろからんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまゐらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱の心も出でくべし」とあります。

しかし、より深く考えますと、改造されるというのは、常識的世界での善という意味においてではなく、自己自身が宗教的世界の視点からすれば、罪悪深重の凡夫であることを知らしめられ、自覚するということであると言えましょう。宗教的世界の視点から自己を見る眼を持っているという点において、「慧眼見真」の徳が身につくと言えそうです。

このような観点からしますと、宗教的情操教育とは、心の宗教的世界は人間生活にとって重要な意味をもつことであることを知ることであり、文学や絵画、音楽を若いときに学ぶことの重要性以上に大切なことを生徒や学生に意識させることにあると思います。

4．本願寺派門徒の宗教行動と宗教意識[5)]

ご存じのように、本願寺では、１９７３年以降、ほぼ5年ごとに国勢調査のように「宗勢実態基本調査」をやっています。この第5回(1983)と第7回(1996)の調査において、私は調査グループの代表として関与しました。第5回の時の本願寺派総長は豊原大潤先生でした。この方はお医者さんでもあったので、コンピューターを使ってもよいから、健康診断のように教団のどこが病的で、どこが健康であるのかというような調査をするようにという注文がありました。

ですから、第５回の調査当時、外注にしてもまだ高価であったコンピューターを使って、それまでやらなかった調査をしました。その中から、本日のテーマに関連する所だけを取り上げます。第５回の調査時には、約２０％の末寺を対象にしましたが、第７回の調査では、教団の全末寺の男女の門徒代表の方に質問票を送り、回収率は、５０．６％（約１万人の男女）でしたが、次のようなことが解明されました。

日常的宗教行動と宗教意識は、平行的に相関しています。つまり、占い、祈願、縁起物に関心のある行動をする人の宗教意識は世俗的、俗信的傾向が強いこと。日常的に勤行をし、聴聞もよくし、聖典経典から学び、み教えを学ぶ行動をする人は、宗教意識も純粋である。このような人は、第７回の門徒代表の調査では、約４０％います。もっとも調査対象が、門徒総代や仏教婦人会会長が中心ですから、いわば門徒の優等生の方々です。ですから、対象を一般の門信徒や若い人を含めると、この比率はもっと下がる可能性があります。

信仰に関心を持つきっかけは、圧倒的に親の影響によるもの、ついで家庭の雰囲気、そして寺院での活動や身近な者の死、そしてごく少数の中でのトップが、日曜学校、ついで自分の病気や他人の看護、そして家庭の問題等です。先ほど説明した「意味の問題」によるきっかけでの入信は統計的には多くありません。

信仰を深める上で影響を受けた人で、圧倒的に多いのは、父母、それと同等に寺院住職も多く、ついで祖父母と特に女性の場合は坊守、そして先輩や学校の先生と友人です。

ところが、宗教意識の純粋な人の場合のみを見ると、信仰に関心を持つきっかけは、仕事場での人間関係の問題や自分の病気や人の看護、女性の場合には家庭の問題や身近な者の死というような「意味の問題」がきっかけになっていて、また寺院活動や日曜学校、女性の場合には、親の影響や家庭の雰囲気がきっかけとなっています。つまり、純粋な宗教意識の持ち主の場合は、意味の問題や寺院活動、日曜学校がきっかけになっているのが興味深いです。

また信仰を深めるのに影響を与えた人は、宗教意識の純粋な人の場合には、友人、先輩や学校の先生、そして住職や坊守が多く、次いで両親や祖父母の影響があり、両親と祖父母の影響が低くなっています。

また宗教意識の純粋な人は、寺院活動や研修会に熱心に参加し、しかもビハーラ（ホスピス）活動、年寄りの世話、障害者の手助けのようなボランティア活動に参加している人は、すべて宗教意識の高い人たちで、そのレベルの低い人は見事に福祉的ボランティア活動に参加していないのです。

このことについて、もう２０年も前のことですが、当時九州大学の社会学教授であった鈴木広氏が北九州や福岡地域で、社会福祉活動に熱心に従事している人たちの調査をして、その宗教を調べたところ、キリスト教徒が最も多いと予想していたら、浄土真宗の門徒が最も多かったが、これについてはどう思うかと聞かれたことがあります。

その時には、第５回の宗勢実態基本調査で、その地域には、中津方面の熱心な豊前門徒が、

北九州・福岡地域に都市化が進むにつれて人口移動して来て、その人達が奉仕活動でも熱心であることは分かっていましたが、それ以上のことは不明でした。

ところが第７回の調査では、宗教意識のレベルの高い人ほど、福祉活動に対しても熱心であることが明確にされました。つまり、北九州や福岡には熱心な門信徒が多いのです。

このような人たちは、寺院活動や研修会活動に積極的に参加し、聴聞にも熱心です。浄土真宗では、法話や説教では、常にみ仏や菩薩の真実心や慈悲心、利他心が強調されます。このような宗教的世界の理想像が、浄土真宗の門信徒の常識的世界の論理にどのように影響するのか。それが真宗門徒の利他的社会貢献に影響を与えていることを調査結果は示していますが、それはなぜかと私は思っていました。

その回答のようなものをあるとき獲得できました。２０００年８月８日に本派本願寺で開かれた『真宗教団連合中央研修会』のパネル・ディスカッションで、大谷派の僧侶が、「宗教と道徳の関連性」は「そうせずにはおれない心」によるものだと理解しやすい言葉で説明しました。浄土真宗の門徒の場合、宗教的意識の高い人は、その宗教的世界の理想像（如来の慈悲心と利他心）のモデルの影響を受けて、常識的世界で、福祉的奉仕活動に参加せざるを得なくなると言えます。

このことについては、哲学では、存在（世界観）は当為(価値観)を規定する、つまり、宗教は道徳を方向づけると言われるのですが、浄土真宗ではどのように存在と当為が結びつくのかという明快な説明と資料がなかったのですが、私どもの調査資料はそれを明確に示しています。

宗教的情操教育において重要なことは、このように学生や生徒によいことをせずにはおれない心のモデルとなる、宗教的世界の視点(世界観)を知らしめることであると思います。そうすれば、本当の道徳的情操は、宗教的情操によって方向づけられて生じてくるようになります。最初に申しましたように、青少年期には、宗教情操教育が、成人してからは、宗教情操の自発的探求が大切なのは、以上にお話ししましたような考え方によります。

５．おわりに

もう時間がありませんが、私が最後に強調したいことは、真宗や仏教の伝道に携わる人には、もっと積極的な伝道活動や実践のために、広い視野を持っていただきたいということです。私が50年前に、コーネル大學にフルブライト留学という大変ありがたい奨学金で留学しましたときに驚いたことの一つは、カソリックの若い神父が、神学の学位を取った上で、さらに社会学、文化人類学や心理学等の学位を取りに来ていたことです。真宗教団においても、そのような広い視野を持つ人が、21世紀には必要です。

また私どもの大学では、建学の精神教育を宗教学という必須科目において行っていますが、その科目に必要なＦＤ活動をするために、昨年から、建学の精神の理解度調査を実施して、教

授法の研究をすることが、宗教学担当の先生方によって開始されました。非常に画期的なことであると喜んでいますが、このようなことは、宗門関係学校全体が共同で研究費を獲得して、実施する時代になってきているように思います。

このためには、真宗や仏教伝道の志を持っておられる学生の皆さんには、是非そのような社会（アンケート）調査の技術も持っていただきたいと思います。今日では、どのような分野においても、社会調査の知識や技術を持つことは当たり前のことになってきています。是非龍谷大学から、そのような活動の旋風を巻き起こしていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

注

1） たとえば、文学部哲学科にあった宗教学専攻では、1920～30年代に日本の宗教民族学や宗教社会学の分野においてパイオニアであった宇野円空先生や赤松智城先生などがおられた。宇野円空先生は、後に当時の東京帝国大学に移られ、著書に『マライシアに於ける稲米儀礼』、『宗教民族学』、『宗教学』等がある。赤松智城先生は、当時の京城帝国大学に転出、『朝鮮巫俗の研究』（秋葉隆共著）は今も古典とされている。両先生には、『日本仏教史之研究』の共著、その他の共訳著書もあり、『原始文化叢書（岡書院）』の監修も共にしておられる。その当時の学生で文化人類学を研究し、マリノフスキーの論文を訳された松井了穏先生（旧制中学時代には三木清と同級）は、当時の満州の建国大学に転出された。

昭和24年には、東京帝国大学にて宇野先生に師事され、宗教人類学や文化人類学で大きな業績を残された棚瀬襄爾先生が社会学専攻の教授として着任された。先生には、戦前から戦後にかけて書かれた名著『他界観念の原始形態』（京都大学東南アジア研究双書Ⅰ）があるが、1949年の教養科目の講義『文化人類学』が、そのまま弘文堂から出版され、当時文部省推薦図書とされた。先生は、京都大学文学部に文化人類学講座開設のために1959年に移られたが、講座開設は実現されなかった。しかし、京都大学の東南アジア研究センター設立当初の準備に尽力され、マレーシア研究班の責任者として戦後最初の学際的フィールドワークの開始に貢献されたが、調査研究開始の初年度1964年末に急逝された。

2） 岐阜聖徳学園大学は、昭和47年に教員養成教育学部の単科大学として設立され、現在は、教育学部、外国語学部、経済情報学部の３学部と、大学院としては国際文化研究科修士課程（国際教育文化専攻、国際地域文化専攻）、経済情報研究科博士課程（前期・後期）の２研究科、短期大学部（幼児教育学科、生活学科〈生活学専攻・食物栄養専攻〉）からなり、いずれの学部学科の就職率も全国的に高レベルを維持しているが、中でも教育学部の卒業生の公立小中学校の教員採用試験の合格率は高く、全国の国公私立大学の教員養成学部の中で、この数年間、１～２位にランクされている。教育学部には附属の幼稚園、小学校、中学校があり、同じ学校法人聖徳学園の系列の高等学校に平成22年度から岐阜聖徳学園高校（旧来の附属高校と清翔高校の合併校）が開設される。

3） 私が計画から最後の報告まで関与した宗勢実態基本調査は、第5回と第7回の調査です。第５回(1983)は20％の寺院と男性門徒代表を対象にし、有効サンプル数1,407で、そのまとめは、「宗勢実態基本調査報告書」『宗報』昭和61(1986)年３月号にある。第７回(1996)は、全寺院住職・坊守と門徒代表男女各１を対象にし、門徒代表男女の有効サンプル数は5,061と5,044である。調査のまとめは、「宗勢実態基本調査報告」『宗報』平成９(1997)年９月号にある。

第７回の宗勢実態基本調査の調査結果を、さらに深く分析し、まとめたものに、口羽益生・舟橋和夫共著「日本人の宗教意識と社会的実践～特に浄土真宗の門信徒を中心に～」(『仁愛大学研究紀要』第２号、2003)がある。

4） 「み仏は、「五眼の徳」〈肉眼、天眼、法眼、慧眼、仏眼〉をもって衆生を救済する（『仏説無量寿経』巻

下)」と言われますが、「慧眼は真を見る」とあります。

5) 詳細については、口羽・舟橋共著前掲論文参照。